

突然やってくる 災害に備えて

知ることは、守ること。

防災士になった親子に聞く、事前の備えの大切さ

直方市に、頼もしい親子の防災士が誕生しました。直方第二中学校3年生の三浦睦生さんと、母の優子さんです。中学2年生で資格を取得した睦生さんは、市内で「最年少の防災士」です。

4月9日、市役所を訪れた二人は、市長に資格取得を報告しました。「特別な知識ではなく、みんなが当たり前に防災を考えるきっかけになりたい」と語る睦生さんの姿は、まさに次世代のリーダーそのもの。その瞳には強い想いが秘められていました。



三浦 優子さん

三浦 睦生さん

きっかけは、

学校から持ち帰った
「一枚のチラシ」

令和6年に発生した能登半島地震。連日、テレビやSNSで報じられる被災地の光景を前に、「もし、身近で同じようなことが起きたらどうなるだろう」。三浦さんご家族は、避難場所を話し合い、非常持ち出し袋の準備を始める等、自分たちができる備えをひとつずつ整えていきました。そんな折、睦生さんが中学校から一枚のチラシを持ち帰りました。それは、市内のNPO法人「BOTA山プランニング」が開催する「防犯・防災教室」の案内でした。

「自分にもできることがあるかもしれない。正しい知識を身につけて、家族や周りの人の役に立ちたい」。睦生さんのその想いで、母、優子さんとの親子での「防災士」への挑戦が始まりました。中学生と大人、世代は違えど目指すゴールは同じ。二人でテキストを読み込み、家庭内でのリスクを語り合っていたそうです。そのひたむきな努力の結果、睦生さんは直方市最年少となる中学2年生（当時）で見事に合格。優子さんと共に資格を手に入れました。

「直方のために尽力したい」
若き防災士の決意

睦生さんの視線は、すでに資格取得の「その先」を見据えています。直方市は遠賀川があり、昔から水害も多い地域です。そのことについて、三浦さん親子は、「災害の種類も様々あります。学んだ知識をただ持っているだけでなく、現場で活用して、少しでも被害を予知したり、減らしたりするために活動したいと思います」と話しました。

彼女の目標は防災士だけに留まりません。「他にもたくさんの方に挑戦して、もっと知識を増やしたい。より多くの人の力になりたい」と話しました。これからの活躍が楽しみです。



column



「防災士」ってどんな人？

NPO法人日本防災士機構が認証する資格で、市内では現在85人が活躍しています。

平常時は備蓄のアドバイスや、ハザードマップの確認等、日常の備えを広めます。

災害時は、避難誘導や避難所運営のサポート等、公的機関と協力して活動します。

資格を取るには、養成講座の受講と試験合格に加え、救急救命講習の修了が必要です。近年では「大切な人を守りたい」と、学生や主婦、親子での取得も増えています。

まもなく、梅雨入り。水害への備えを

九州北部地方の梅雨入りは例年6月5日頃、梅雨明けは7月20日頃。わずか1ヶ月半ほどですが、近年の気候変動により、この短期間に想像を超える豪雨が集中するケースが全国的に増えています。

直方市も例外ではありません。長雨による遠賀川の水位上昇、突発的な大雨による内水氾濫、そして住宅地近くのがけ崩れといった土砂災害等、梅雨時期の危険はすぐそばに潜んでいます。



平常時の遠賀川



平成30年 大雨の遠賀川

▲普段穏やかな遠賀川も、水かさが増すと荒々しいようすに変貌する。

自然災害そのものを、人間の力で防ぐことはできません。しかし、その後に続く「被害」の大きさは、私たちの行動ひとつで変えることができます。「避難場所はどこか」「どのタイミングで逃げるべきか」「家にある備蓄は足りているか」。こうした確認を、雨が降り出してから行うのは非常に困難です。

空が穏やかな今のうちに、災害対応の事前準備を整えておくこと。それが、自分と大切な家族を守るための、最も確実に賢い選択です。まずは「知ること」から始めてみませんか。まずはあなたの家の「安全」から。

column 表紙について



直方市消防本部を取材

火災や災害現場での「確実な救助」のため、消防士たちは日々、技術を磨いています。5月18日、その過酷な訓練現場を取材しました。

その日の訓練では「消防救助技術指導会訓練」として、要救助者がいる場所まで垂直な15メートルの壁を2人1組で素早く登る「ロープ応用登はん」、水平にロープを使って安全かつ迅速に渡るスキルを鍛える「ロープブリッジ渡過」、15メートルのはしごを登る準備から登りきるまでの技術を高める「はしご登はん」を実施。消防士たちは、突然やってくる災害に向けて「確実な救助」につなげるため、日々の訓練を実施しています。